自動運転による事故の原因帰属と責任帰属に関する研究

大崎　詩織

問題

自動運転技術への注目が高まっているが、日本はその導入以前に制度整備の面で世界に遅れをとっている。今後、人の感覚に合った制度整備を進めていくためには、自動運転の導入が事故の責任帰属と原因帰属にどのような変化をもたらすのかについて明らかにする必要がある。また、これまでの自動車事故の責任研究では、責任判断を行う立場のバイアスについて一貫した結果が得られておらず、検討を行う必要がある。

仮説

AI に対して心の知覚を強く感じる人ほど、AI への責任帰属が大きくなる(仮説 1)、Internal 傾向の強い人ほど、運転者への責任帰属が大きくなる(仮説 2)、ある対象への責任帰属の大きさと慰謝料額の判断は正の相関関係を示す(仮説 3)の 3 つの仮説に加え、自動運転の有無と事故時の立場が責任帰属と原因帰属の判断に与える影響を探索的に検討した。

結果

仮説 1、仮説 2 はともに不支持であり、仮説 3 は支持される結果となった。

また、自動運転の導入によって、これまで運転者と被害者に帰属されていた原因と責任が、自動車メーカーとAI に集まることが分かった。自動車メーカーについては、支払うべき慰謝料額も大きく判断されるようになることが明らかになった。また、立場のバイアスについては、自動車メーカーへの原因・責任帰属及び歩行者への原因・責任帰属は事故の当事者である場合に大きくなり、当事者の場合には「運転者以外の周囲にも原因と責任がある」と判断されることが明らかになった。

さらに、自動車メーカーへの責任に関して追加の分析を行ったところ、人は AI へ責任帰属と自動車メーカーへの責任帰属を混同しているという先行研究の主張を支持しない結果を得た。ただし、事故の原因を自動車メーカーとAI に帰属するほど、自動車メーカーに大きな責任を帰属することが明らかになった。AI への信頼感に関して追加の分析を行ったところ、事故の第三者条件においては、AI への信頼感が高いほど AI に大きな責任を帰属することが明らかになった。

結論

今後AIを活用する場面はますます増えていくことが予想される。本研究では、自動運転あり条件では運転者への原因帰属・責任帰属の両方が小さくなり、AI や自動車メーカーの原因帰属および責任帰属が大きくなるという結果を得た。また、人は AI への罰の与え方について理解できていないものの、AI に責任を帰属することが分かった。これを医療の場面に置き換えて考えると、医者が AI の判断をもとに診断を行った結果が医療ミスに繋がった場合、医者への原因帰属・責任帰属が小さく判断され、ミスの原因や責任の所在があいまいなまま AI に原因や責任がなすりつけられるということも起こり得るかもしれない。「AI への罰」が何であるかを結論づけることができるまでは、AI の判断に責任を持つのは誰であるかをあらかじめ明らかに示したうえで、AI の判断を活用していく必要があるだろう。また、AI を自動車運転場面に導入していく上で、事故に直接関係する当事者と直接関係しない第三者の間で、責任判断に相違があることを把握しておくことが求められるだろう。（社会心理学）